

早稲田大学大学院日本語教育研究科
修士論文概要

外国につながる子どもは「葛藤」を乗り越える力として
「ことば」をどのように獲得したか

「川崎市ふれあい館・中高生学習サポート」での日本語支援を通して

金丸 巧

第1章 序論

本研究は、外国につながる子どもが、かれらの「葛藤」と向き合い、乗り越える力として「ことば」を捉え、その力を育てていくための年少者日本語教育の必要性を主張するものである。

筆者が、外国につながる子どもの「葛藤」に注目するようになったきっかけは、支援者として参加している「川崎市ふれあい館・中高生学習サポート」（以下、「学習サポート」）での支援における、ある外国につながる子どもの一言であった。それは、教科学習に対する「こんなの、どうでもいい」という声であり、その声の背景には、かれらの「葛藤」が潜んでいるということに気がついた。それ以降、筆者は、外国につながる子どもに「こんなの、どうでもいい」と言わせたり、学習や将来を考えることに「つまらない」「意味がない」と思わせたりしているかれらの「葛藤」を、かれらが自分で乗り越えるためにはどのような力が必要か、という問題意識を持つようになった。

「学習サポート」に通う滞日4、5年の子どもたちは、多くの語彙や表現を知っている。しかし、その言葉を、かれらが「葛藤」と向き合い、乗り越え、将来を見通すために使えているとは言えない。だからこそ、かれらが知っている言葉を、かれらが「葛藤」と向き合い、それを乗り越える力としての「ことば」へと成長させていくことが必要であると考えた。本研究では、その過程を、知識としての言葉から、「葛藤」を乗り越える力としての「ことば」への成長と呼ぶ。

このような立場から、「葛藤」を抱えた外国につながる子どもと関わる支援者は、外国につながる子どもの「葛藤」を見つめ、「葛藤」を乗り越える力として「ことば」を捉え、子どもがその力としての「ことば」を獲得していく過程を支えることが必要であると主張したい。そのために、「学習サポート」での実践を通して、以下の2点を明らかにする。

- ・外国につながる子どもの、「ことば」への成長の過程を明らかにする。
- ・「ことば」への成長は、学習や将来の見通しを立てることに意味を見出せない外国につながる子どもにどのような影響を与えたのかを明らかにする。

第2章 先行研究

第2章では、「葛藤」を抱えた外国につながる子どもが不登校やドロップアウトといった問題に陥らないための日本語支援を目指す上で支援者は何をすべきか、という視点からそれに関わる先行研究を概観した。

まず、日本人の子どもが、学校に通わない・通えない、もしくは、実際には通っているが、そのような危険性を抱えている場合、その背景には、かれらの様々な不安や葛藤があることが分かった(石浦・塚野 1997)。しかし、その不安や葛藤を話せる関係性や、子どもがじっくりと自分で考えられるような場所があれば、不安や葛藤を乗り越える力を得ることができる(伊藤 2009)。次に、外国につながる子どもの場合、かれらの「時間軸と空間軸がともに切断されている」(佐藤 2008)ことで不安や葛藤が生まれやすいということが分かった。以上を踏まえ、筆者は、自身に関わる子どもたちの不安や葛藤について、かれらが、もがきながら闘っているという意味を込めて「葛藤」と呼び、それは、「どうして、日本にいるのか」という気持ちと、それを受け止めなければならない現実とのズレから生まれる、疑問、憤り、焦り、孤独、戸惑いといった様々な気持ちの集合体であると定義した。

このような「葛藤」を抱えた外国につながる子どもへの支援においては、目に見える不登校や不就学といった現象を教育制度の面から議論している研究(竹之下 2005, 村田 2007 など)がほとんどであり、その議論からは、中心にいるはずの子どもの姿が見えてこない。そのような子どもの姿は、制度に関する議論にすり替えられてしまっているのである。その結果、外国につながる子どもの「葛藤」と、かれらの「ことば」は乖離して語られ、つながりが見られない。

しかし、「葛藤」を抱えた外国につながる子どもへの支援と、同様の課題を抱える日本人の子どもへの支援の「異なり」は「ことば」の視点であり、支援者が子どもの「葛藤」に注目し、「葛藤」を乗り越える力として「ことば」を捉える必要がある。その力は、考える活動をおこなうための力としての「学習言語能力」の一側面であり、それは、語彙や文法の詰め込みが「学習言語能力」の伸長につながるという認識を問い直すことでもあった。さらに、「ことば」は関係性の中で生まれ、その「ことば」が生まれるために、子どもと支援者にとっての生きた目的を共有していく必要があるということが明らかになった。

第3章 研究方法

第3章では、本研究のフィールドである「川崎市ふれあい館・中高生学習サポート」（以下、「学習サポート」）の概要と、調査の手続きについて述べた。

「学習サポート」は、近隣に住む外国につながる中学生、高校生、学齢超過者を対象として、高校受験指導、進路相談、初期日本語指導などをおこなう地域の教室である。筆者は、「学習サポート」に参加し、子どもたちや支援者との距離を縮めていく過程において、子どもたちの問題を自分の問題として考え、それを問題意識として成長させていった。つまり、本研究の問題意識は、「学習サポート」に集う子どもたちや支援者たちと筆者との間で生まれたものであり、それが、「学習サポート」を本研究のフィールドに設定した理由であった。

本研究では、主に3種類のデータを分析対象とした。1つ目は、「学習サポート」の子ども及び支援者におこなったインタビューである（音声データ①）。インタビュー協力者は、子ども3名、支援者6名の計9名である。子どもについては、筆者とのラポールが形成されていたことや、かれらとの会話の中からかれら「葛藤」が感じられたという理由で3名を選出した。支援者については、毎週参加する支援者の全員を選出した。インタビューは、25分から1時間程度、日本語でおこなった。内容はICレコーダーで記録し、文字化した。

2つ目は、フィールドノートである。これは、筆者が2009年6月より半定期的にペアとなって支援を続けてきた子どもXの様子を記録したものである。支援終了後、その日の内容を可能な限り思い出しながら記録した。

3つ目は、筆者が調査に参加した、多文化共生教育ネットワークかながわ（以下、ME-net）と（財）かながわ国際交流財団（以下、KIF）共催の「外国につながりを持つ子どもの教育に関する調査プロジェクト」（以下、「プロジェクト」）におけるインタビューデータの引用である（音声データ②）。このインタビューは、神奈川県内の定時制高校に通う、滞日3年以内の外国につながる高校生11名におこなった。手続きについては、1つ目のデータと同様であるが、来日間もないということから通訳者が入ったという点と、筆者は主に記録者として参加したという点において異なる。このデータを引用した理由は、本研究では、時間的制約のため、子どもXを縦断的に追跡することはできなかったが、高校進学を果たした外国につながる高校生に横断的にインタビューすることで、高校進学後の課題が浮かび上がると考えたからである。

本研究は、外国につながる子どもが、知識として蓄えられていた言葉を、「葛藤」を乗り越える力としての「ことば」へと成長させる過程を明らかにし、その成長が子どもに与えた影響を探ることを目的としているため、以下の観点から音声データ①及びフィールドノーツを分析した。

- ・ Xが「葛藤」と向き合う中から、どのような「ことば」が生まれたか。
- ・ その「ことば」が生まれた時、支援者である「私」は何をしたのか。

さらに、Xのような外国につながる中学生が、高校進学後どのような支援が必要なのかを考えるために、音声データ②を以下の観点から分析した。

- ・ 高校への進学を果たした外国につながる子どもは、学習、将来、友人関係において何を感じており、それは、かれらの高校生活にどのような影響を与えているのか。

第4章 結果と考察

第4章において「学習サポート」でのインタビュー及びフィールドノーツを分析すると、Xが、「葛藤」と向き合い、乗り越える力として「ことば」を獲得していった過程において、支援者である筆者との関係性が重要な意味を持っていたことが明らかになった。Xの抱える「葛藤」は将来に対するものであり、それが、学習に対する拒否の態度として表れていた。しかし、筆者との関係性が構築されていくことで、学習を拒否する「理由」を語るなどの変化が見られた。それは、その関係性において、Xが「なぜ、自分は、学習にやる気が見出せないのか」という問題を整理する機会を得たことを意味している。また、「この人になら話しても良いかもしれない」というXの安心感が「ことば」を生み出したと言える。さらに、Xの「ことば」に対する筆者の働きかけが、さらなるXの「ことば」への成長を促しており、学習や将来に対する前向きな姿勢へとつながっていった。その時、筆者がXの「ことば」に対して働きかけることができたのは、Xの問題を「他人事」としてではなく「自分事」として捉え、Xとの間に重なりを作ろうとしたからであった。それは、Xが「何を考えながらそれを話しているのか」といったXの視点の先に気づくことであり、「子どもの視点」を共有することであった。その結果が、Xの「葛藤」と「ことば」を結び付けることにつながった。

一方で、高校進学を果たした外国につながる高校生は、高校生活において様々な課題を抱えており、その課題は、かれらの不安と密接に関わっていることが分かった。しかし、

表に現れる課題は、かれらの言語知識不足によるものだという、周囲の人間の認識によって、その不安は見えないものにされていた。本研究で筆者が定義した「葛藤」と、高校生が抱える不安は同義ではない。しかし、外国につながる子どもが抱える課題の大元であるにもかかわらず、周囲の人間から見えないものにされてしまう危険性があるという点において共通であり、学校の中でも学校の外でも、長期的な視野に立った、「ことば」への成長を支える年少者日本語教育の必要性が明らかになった。

第5章 結論

本研究では、外国につながる子どもが、かれらの「葛藤」と向き合い、乗り越える力として「ことば」を捉え、その力を育てていくための年少者日本語教育の必要性を主張することを目的とし、「学習サポート」でのXや支援者である筆者の成長の記録と、既に高校進学を果たした外国につながる高校生の語りを分析及び考察した。そこで明らかになったのは以下の2点である。

- ・「ことば」は、外国につながる子どもが抱える「葛藤」を乗り越える力であり、それは、ことばの力の一側面である。
- ・「葛藤」を乗り越える力としての「ことば」は、子どもと支援者の関係性の中で生まれるのだが、その関係性が構築されるためには、支援者が子どもの問題を「自分事」として捉え、「子どもは、何を思ってそれを話すのか」という「子どもの視点」を共有する必要がある。

学校の中では、なかなか学びの機会を得ることができずに孤立していく子どもも、地域の教室の中では、いきいきと学びの機会を得ている場合がある。しかし、そのような子どもであっても、学校の中での支援は重要であり、かれらの「葛藤」と「ことば」を結び付けて考えることで、かれらのことばの力を伸ばさせることができるということを示した。そして、外国につながる子どもの教育を支える補助輪としての年少者日本語教育は、学校での支援という片輪と、地域での支援という片輪があってこそはじめて成り立つものであり、その成長を支えることが、学校や授業や将来に意味が見出せず、不登校やドロップアウトといった問題に陥る危険性をもった外国につながる子どもへの日本語教育において重要であると指摘した。

参考文献

- 石井恵理子 (2006) 「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」『日本語教育』第 128 号、pp.3-12
- 石浦美輝子・塚野州一 (1997) 「不安を抱えた不登校女児の指導過程の分析」『日本教育心理学会 第 39 回総会 発表論文集』 p.541
- 伊藤隆 (2009) 「父母との絆が中学生の登校忌避感情に及ぼす影響」『日本教育心理学会 第 51 回総会 発表論文集』 p.91
- 川上郁雄 (2009b) 「リテラシーはどこにあるのか」『リテラシー4—ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版、pp.182-188
- 佐藤郡衛 (2008) 「外国につながる子どもの学習支援ネットワークの構築」『シリーズ 多言語・多文化協働実践研究 4 【佐藤・金班】 07 年度活動 外国につながる子どもたちをどう支えるのか 当事者も参加した拠点・ネットワークの構築—川崎市での実践—』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、pp.66-80
- 竹ノ下弘久 (2005) 「6 章—「不登校」「不就学」をめぐる意味世界」『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版会、pp.119-138
- 村田鈴子 (2007) 「ニューカマーの子どもたちの不就学問題について」『インターカルチュラル』第 5 号、pp.112-125